

中国文学研究者による日本漢詩研究

市川 桃子

日本漢詩は、日本文学の中で重要な位置を占めている。平安時代以来、漢文・漢詩は日本の知識人にとって大切な学問であり、教養であつた。ものがたり文学が盛んに書かれた平安時代にも、男性は漢文を学び作成していた。そのうち五山の僧侶たちによる漢文・漢詩研究の時代を経て、江戸時代から明治初期にかけては、多くの知識人によつて漢詩が自在に書き続けられ、高い水準の文学が生み出された。そこで、日本漢詩は、これまで日本文学研究者によつて詳細な研究が行われてきた。

それでは、中国の漢詩を扱う中国文学研究者は、どのような角度から日本漢詩を扱うことができるのか。もちろん、作家研究、作品研究といった基礎的な研究は、日本文学研究者と同様に中国文学研究者にとつても可能であるし、また必要な研究である。しかし本論では、特に中国文学研究者が行い得る特徴的な研究方法を取りだして、紹介したいと思う。本論で紹介する研究方法は次の三点である。

(一) 日本漢詩は中国漢詩をどのように受容したか。

(二) 同一主題についての、日本漢詩と中国漢詩の比較。
(三) 日本漢詩はどのように獲得されてきたか。

一 日本漢詩は中国漢詩をどのようにに受容したか

— 柳宗元を例として — (一)

柳宗元の作品が日本に紹介されたのは平安時代である。このころは柳宗元より韓愈の方がよく読まれていた。柳宗元が注目されるのは十五〜十六世紀の五山文学の時代である。五山では、主に僧侶たちによつて、しきりに柳宗元詩文の研究が行われた。その形跡は『柳文抄』および『新刊五百家註音辯唐柳先生文集』の書き込みなどによつて知ることが出来る。

1 江戸時代の柳宗元像

江戸時代の漢詩人が持っていた柳宗元像とはどのようなものだっただろうか。第一に柳宗元は山水詩人だということでは知られていた。石川丈山(一五八三—一六七二)は『新編覆

『舊集』続集に収められている「答林羅山」という手紙の中で「彼曾預柳州之記、以傳高操於千載。予亦依足下之文、而得不朽於百世。(彼は曾て柳州の記を預り、そこに込められている高い操を千年後まで伝えた。私もあなたの文によつて百世の後まで残ることができるだろう)」と述べている。これは石川が林の文を称揚している部分ではあるが、柳宗元の、おそらく「永州八記」などの山水記がその気高い精神を千年後まで伝えていっていることを記している。やや後になるが、祇園南海(一六七七—一七五二)は『南海先生文集』巻の五「浴龍泉記」で龍泉についての描写を行い「昔時育柳州香山輩説、水聲尤極其妙、且謂聽之足以忘其憂也(昔、柳宗元と白居易たちは、水の音はもつとも美しさを極めており、これを聞けば愁いも忘れる、と述べている)」と言つて、泉の水音が優れていることを強調している。柳宗元の山水記を読んでいる証左である。梁田蛻巖(一六七二—一七五七)も『蛻巖集』巻の七「輪田崎記」で「予嘗讀柳州五嶺諸山記(わたしは曾て柳州の五嶺諸山記を読んだ)」として、その読後感を述べている。蕨孤山(一七三五—一八〇二)も『孤山先生遺稿』巻の十五「遊鷗水記」の中で「余適讀柳子厚袁中郎諸遊記。(わたしは偶然柳子厚、袁中郎の諸遊記を持て来た)」と、柳宗元の山水記を手に入れていることを示している。時代の異なる人々が柳宗元の山水記を読んでいたことが分かる。

詩の中では菅茶山(一七四八—一八二七)が『黄葉夕陽村舍詩』の中で、次のように、甲山路の描写を柳宗元に頼みた

いと言う。

之甲山路上二首(其二) 菅茶山

石上流泉幾股分 石上 流泉 幾股に分かる

人聲空響兩崖雲 人聲 空しく響く 両崖の雲

黄溪諸記誰能續 誰か能く続けん

呼取柳州柳使君 呼び取らん 柳州柳使君

そのほかの詩文を見ても、柳宗元が政治家として世の中を批判していた面は強調されず、その山水を追憶する詩や文が日本漢詩に受容されていたことが分かる。

2 江戸漢詩に描かれる柳宗元詩

作品の中から、江戸漢詩と柳宗元との関係を見た場合はどうであろう。江戸時代の選集を調査したところ、江戸の人々は、一般には柳宗元の作品の、限られたものしか見ていなかったことがわかった。ことに代表作とされている「江雪」詩が江戸時代の選集にほとんど見当たらなかったことは意外であった。『圓機活法』の中でも、作者名を欠いた詩句を載せているだけである。しかし、柳宗元「江雪」詩と江戸漢詩の関わりを調査すると、ことに江戸初期ではこの作品が重要視されていたことが分かる。

ここで、江戸漢詩の中でも、柳宗元「江雪」詩に深く関わる作品によつて、日本漢詩がいかに柳宗元を受容したか、その傾向を見てみよう。

江戸初期には「江雪」詩をそのまま主題にした作品が幾つも書かれている。

獨釣寒江雪

伊藤東涯（一六七〇—一七三六）

萬頃蒼波濶

万頃蒼波濶く

玻瓈湛不流

玻瓈 湛えて流れず

凍魚貪餌聚

凍魚餌を貪りて聚り

饑鳥避船遊

飢鳥船を避けて遊ぶ

旋掃笠檐雪

旋で笠檐の雪を掃き

時望□□□

時に□□□を望む

高懷天地外

高懷天地の外

欲去幾遲留

去らんとして幾たびか遅留す

（□は解説不能文字）

柳宗元の「江雪」詩は、流滴の地で、激しい望郷の思いに身を焼かれながらも、己の信念を抛り所に、厳しい孤独の中で毅然として過ぐす作者の孤高の姿が描かれている。しかし、江戸幕府が始まってからしばらく経ち、時代が安定した時期に書かれた江戸漢詩には、そのような厳しさは見られない。この伊藤東涯の作品では、ガラスのように青く凍えた波、飢えた魚やカラスを描きながらも、簑笠の翁は高懷をいだき、天地の外にあるこの地をむしろ去りがたく感じている。つまり、この光景にある寒江は、脱け出すことのできない厳しい土地ではなく、賢人がみずから留まることを願う高興の地なのである。

梁田蛻巖（一六七二—一七五七）「依宰相小倉公韻呈鶴林師二首之一」詩「寒江雪裡垂綸坐、萬壑千峯已是春（寒江雪裡 綸を垂れて坐し、万壑千峯 已に是れ春）」では、千峯には春が来ているし、服部南郭（一六八三—一七五九）「賦得獨釣寒江雪」詩「前村風且白、唯看酒旗寒（前村風且つ白く、唯だ看る酒旗の寒きを）」では酒屋の旗がひるがえっている。

釈大典（一七一九—一八〇二）の絶句「賦得獨釣寒江雪」詩「積素汀洲暮、孤舟擁短簑。一絲垂不動、片月忽生波（積素 汀洲の暮、孤舟 短簑を擁す。一糸垂れて動かず、片月 忽ち波に生ず）」は、柳宗元「江雪」詩がそのまま夜になった光景を想像し、波間に月の光を浮かべて、景色として美しく描き出している。江戸初期の人々が思い浮かべる寒江は、清冽な美を持つあこがれの山水であつたであろう。

江戸中期以降になると、漢詩はますます盛んになるが、柳宗元「江雪」詩を詠う作品はむしろ少なくなる。この時期には「寒江獨釣図」という絵が広く見られていて、そこから柳宗元「江雪」詩が知られていたのではなからうか。釈六如（一七三七—一八〇二）「獨釣寒江雪」詩「釣簑空自成圖樣、水冷江魚不上綸（釣簑 空しく自ら図樣を成すも、水冷やかにして江魚綸に上らず）」では、簑笠の翁は絵としては良いが、水が冷たくて魚は釣れないだろうな、という。蠣崎波響（一七六四—一八二六）「獨釣寒江雪」詩「長竿獨笠直成畫、盡日寒潮不得魚（長竿獨笠 直ちに画に成るも、尽日寒潮 魚を得ず）」も同じ趣向である。市河寛斎（一七四九—一八

二〇「分賦屏風一物得釣江雪」詩や土井誓牙（一八一七—一八八〇）「題耳白屏風」詩も屏風に柳宗元の詩を見る。

総じて、江戸中期以降になると、江戸初期にあったような、柳宗元「江雪」詩に内包される精神性への同調、というものは無くなつて、言葉の遊びのようになっていく。

3 小結

柳宗元はごく若い頃に政争によつて僻遠の地に追放され、生涯そこから戻ることができなかった。彼はその困難な生涯を通じて高い矜持を保つことによつて精神の崩壊を免れたのであつた。したがつてその作品の全てに、張り切つた琴線のような、悲哀を帯びた緊張を感じ取ることができる。

一方、江戸漢詩に詠われる柳宗元にはそのような緊張感は見られない。ことに江戸後期の作品の中では柳宗元像は軽くなつていく。それは、この時代の、開国の不安をはらんだ太平の世の空氣を映しているのかもしれない。

柳宗元だけではなく、他の詩人についても調査することによつて、日本漢詩が中国漢詩をいかに受け止めていたか、それが日本の世相や詩派の興衰を映してどのように変化したのか、より明らかになつていくことであらう。

二 同一主題についての、日本漢詩と中国漢詩の比較

— 韓信を詠じる詩を例として —

詠史詩は、歴史上の事件や人物などを詠む分野である。同一の事件や人物の生涯をどのように受け止めるのか、読み手

の意見や感性が現れやすいという点から、詠史詩を比較の対象に選んだ。

ここで、まず韓信の生涯を三つの時期に分けてみよう。

（甲）青年時代は貧しく仕事もなかった。若者たちの侮蔑に耐えてその股をくぐつた逸話、漂母（洗濯を生業とする女）から施しを受けた逸話などがある。

（乙）劉邦の漢軍に参加し、蕭何に才能を認められる。劉邦のもとから逃げようとしたとき、蕭何が追いかけて連れ戻した逸話、劉邦が壇を築き礼を尽くして大將に抜擢した逸話がある。そののち漢の統一に貢献して出世し、斉王となつた。

（丙）謀反を起こしたとして捕らえられ、三族ごとく誅殺された。

この三つの区分を踏まえて、唐詩と江戸漢詩を比較してみよう。

1 唐詩の韓信

盛唐詩では、杜甫や李白が、韓信の苦境を己になぞらえ、さらに韓信の出世と自分の境遇を比較して、我が身を嘆く作品を作っている。

贈新平少年 李白

韓信在淮陰 韓信 淮陰に在りて

少年相欺凌 少年 相欺凌す

屈體若無骨 體を屈して骨無きが若し

壯心有所憑 壯心 憑る所あり
 一遭龍顏君 一たび龍顏の君に遭うや
 嘯吒從此興 嘯吒 此より興る
 千金答漂母 千金もて漂母に答え
 萬古共嗟稱 萬古 共に嗟稱す
 而我竟何爲 而て我は竟に何爲るぞ
 寒苦坐相仍 寒苦 坐るに相仍る

(以下略)

宴王使君宅題二首 杜甫
 漢主追韓信 漢主 韓信を追ひ
 蒼生起謝安 蒼生 謝安を起たしむ
 吾徒自漂泊 吾れ徒らに自ら漂泊す
 世事各艱難 世事 各 艱難なり

(以下略)

盛唐期の人々にとって、極貧から齊王となった韓信はあこがれの人物像であつた。
 中唐以降は傾向が異なる。中唐以降の詩の中で韓信を主題とする作品の特徴は、韓信廟を詠じるものが目につくことである。

卻過淮陰弔韓信廟 李紳
 功高自棄漢元臣 功高けれど自ら棄つ 漢の元臣
 遺廟陰森楚水濱 遺廟 陰森たり 楚水の浜

英主任賢增虎翼 英主 賢を任じて虎翼を増すも
 假王微福犯龍鱗 假王 福に微りて龍鱗を犯す
 賤能忍恥卑狂少 賤にして能く恥を忍び狂少を卑しむも
 貴乏懷忠近佞人 貴にして忠を懷くこと乏しく佞人に
 近づく
 徒用千金酬一飯 徒らに千金をもちて一飯に酬い
 不知明哲重防身 明哲の防身を重んずるを知らず

この詩の主題は、韓信が慢心してついに殺されたところにある。殷堯藩「韓信廟」詩には「荒涼古廟惟松柏（荒涼たる古廟 惟だ松柏あるのみ）」とあるので、淮陰に建てられていた韓信廟は唐代には寂れていたのではないか。李紳はその有様を目にして、韓信の生涯を思い起こし、虚無の感に襲われたのである。

2 江戸漢詩の韓信

江戸時代初期、十七世紀生まれの人々は、次の作品にあるように、「大きな功績をあげたこと」と、「最後に殺されたこと」を主なモチーフとする。

淮陰侯贊

淮陰侯の贊

伊藤東涯（一六七〇—一七三六）『紹述先生文集』

國士無雙 夙從漢王 國士無双 夙に漢王に従い
 多多益善 孰掩其功 多多益善 孰か其の功を掩わん
 豈謀身之不及吁 豈に謀身の及ばざらんか

高鳥盡而良弓藏

高鳥尽きて良弓藏さる

江戸時代中期、十八世紀生まれの人々の時代になると、「韓信の股ぐり」「漂母が食事を恵む」という絵が描かれるようになったようで、その図を詠じる作品がほとんどとなる。そこで「若いころに恥や飢えを忍び」、のちに「大きな功績をあげたこと」が主なモチーフとなる。この傾向は江戸時代後期、十九世紀生まれの人々の時代にも続く。

漂母飯韓信圖

漂母韓信に飯するの図

頼山陽（一七八〇—一八三二）『山陽詩鈔』卷之二

龍虎撐脇久失靈

龍虎 撐脇して 久しく靈を失う

此聞不復博蓼羹

此に聞く 復た蓼羹を博めざると

誰投一飯王孫腹

誰か一飯を王孫の腹に投ぜん

幾粒蒸爲百萬兵

幾粒か蒸して百万の兵にならん

韓信股下圖

韓信股下の図

曹茶山『黃葉夕陽村舍詩』後編

袴閑容四海

袴間に四海を容る

非是袴閑寛

是れ袴間の寛きにあらず

四海原微物

四海原より微物にして

在君方寸間

君が方寸の間に在り

3 小結

唐詩では、韓信の境遇を我が身に引きつけて、己の境遇を

嘆いたり、人生への虚無を感じたりする作品が書かれている。一方、江戸漢詩では、人生の教訓といった色彩が強くなる。唐代の韓信廟、江戸時代の韓信図を含めて、時代と地域の異なる二つの文化の違いを見て取ることができる。様々な人物像について、中国でも日本でも多くの詠史詩が書かれているので、ひとつひとつを見ていくことによって、より興味深い成果を得られることと思う。

三 日本漢詩はどのように獲得されてきたか

—新井白石を例として—

江戸初期に生きた新井白石（一六五七—一七二五）の青年時代の作品から、新井白石が何に基づいて詩を学んだかを十名近くのグループで調査した（2）。この調査を通して、江戸の漢詩人がどのように勉強して漢詩作成の素養を積んだのかという課題を研究する。

新井白石が二十六歳までに書いた作品を収録した『陶情詩集』の百首について語彙調査を行い、そこから、白石がどのような本を学んだのか、ということを示明らかにしようとした。たとえば、江戸初期にさかんに出版された『錦繡段』という書物である。

1 『錦繡段』と新井白石

『錦繡段』とは室町時代の臨済宗の僧侶、天隱龍澤（一四二二年—一五〇〇年）が作った選集で、唐宋元三代の三百余首の絶句を選んで収めてある。本を開いてみると、収録作品

には四庫全書に収められていない作品が多く、見たことのない作者名も散見され、明詩も数篇見られる。この当時流行し盛んに出版されていたことから考えて、新井白石もこの本を見た可能性がある。

まず重なる詩句について。

『錦繡段』に載る作品中の詩句と全く同じか、部分的に重なる詩句がかなりの数で見られた。気づいた例のうちの二つを新井白石の詩句と並べて挙げる。

并呑鷗鷺一千頃、震動貔貅百萬軍

新井白石 ○一三「觀潮」詩

漢宮眉斧息邊塵、功厭貔貅百萬人

『錦繡段』〇八一 許忱甫「明妃曲」詩

次に語彙について。

多くの言葉が『錦繡段』から取られている。「團茶」などは特徴的な語で、偶然に重なったとは考えにくい。

淺碧飽嘗新釀酒、輕黃初試小團茶

新井白石 ○二六「春日小園雜賦」詩

機燒香篆點團茶、春酒留連又一家

『錦繡段』三二六 李潤甫「僧舍晚歸」詩

最後に発想について。

発想やイメージが重なる詩句も多い。次の例は、表題が同

じで、重なる語が多く、「川辺の砂道が雪明かりや稲妻に照らされている」という、よく似た光景が歌われる。白石はこのとき、『錦繡段』に収められた作品を読み、そこに描かれている風景に感じ、その主題に沿ってイメージを起こして自分の作品を組み立てた、という順序で詩を書き上げたのではなかったか。

江村月上將晚 沙路雪明獨歸

(江村に月上り 將に晚れんとす 沙路 雪のごとく明

らかにして独り帰る)

新井白石 ○四八「暮歸」詩

行過斷橋沙路黑 忽從電影得前村

(行きて斷橋を過ぎて沙路黒し 忽ち電影に従りて前村を得)

『錦繡段』二〇一 明・趙周臣「暮歸」詩

今回の調査で、白石と同じ時代に多様な形で出版を重ねていた『錦繡段』を、白石がよく勉強し吸収していたことがわかった。詩句が重なる例を見ると、単に古詩を剽窃したようにも見えるが、しかし、彼はむやみに『錦繡段』の、あるいは他の詩集にある詩句を切り取って自分の作品に埋め込んだのではなかったと思う。『錦繡段』を読んで白石がどのように自分の作品を発想していったのか、を考えてみよう。発想の項では、白石が先人の漢詩にあるすぐれた発想やイメージを学び、さらにそれらの詩句に共感して、自分の思い

を表現するために適切に使っている様子がみられる。詩語の項を見ても、いろいろな作品を読みながらイメージを膨らませ、様々な景色の中を逍遙する姿が見られる。

白石は様々な書物を参考にして漢詩の制作方法を学んでいたが、以上の調査から、その中でもことに『錦繡段』から学び得たものが大きかったと考えられる。

2 『聯珠詩格』と新井白石

『聯珠詩格』は七言絶句の選集である。元の于濟（字は徳夫、号は黙齋）が三巻本を作り、蔡正孫（字は粹然、号は蒙斎野逸）が増訂して二十巻本とし、元の大徳四年に出版されているが、朝鮮や日本に渡った本が重版され翻訳されて今に伝えられている。ことに、日本では室町期から江戸初期にかけて多くの版本がある。すなわち、白石が若いころに流行していた本であった。

収録作品の中には、『四庫全書』に見られない作品がある。すなわち、中国の清朝には伝えられず、本書の中にのみ残ると思われる作品がある。

まず詩語が重なる例を見よう。

次の作品は、多くの詩語が『聯珠詩格』に収録される作品と重なる例である。

江行 新井白石

沙鷗不起水蘼蘼 沙鷗は起たず 水蘼蘼

漁笛風飄紅蓼濱 漁笛は風に飄る 紅蓼の浜
萬古高天秋色老 萬古 高天 秋色老い
夕陽長送渡江人 夕陽 長えに送る 渡江の人

この作品の内、原文に傍線を引いた、「沙鷗、蘼蘼、漁笛、風飄、紅蓼、萬古、秋色、秋老、夕陽、渡江人」の語が、『聯珠詩格』に収録される作品にある語である。この中には、「萬古」「夕陽」「秋色」のように、ごく一般的な詩語もあるが、また、「沙鷗、蘼蘼、漁笛、紅蓼、渡江人」のように特徴的な語も含まれる。試みに、これら特徴的な五つの語を『唐詩選』に探してみると、五つの語の内、「沙鷗」の一語しか見つからないのである。ここから、白石が『聯珠詩格』を見て詩語を拾った、という可能性が示唆される。

次に、特徴的な詩語、あるいは詩句が重なる例について見てみよう。

春日小園雜賦

數畝春畦管物華

唯將風月即爲家

淺碧飽嘗新釀酒

輕黃初試小團茶

花勻香膩淡生蠶

草信金鉤斜發芽

安得思如摩詰手

寫成畫軸向人誇

新井白石

數畝の春畦、物華を管り

唯だ風月を將て 即ち家と爲すのみ

淺碧 嘗めるに飽く 新釀酒

輕黃 初めに試む 小團茶

花は香膩を勻わけて 淡く蠶を生じ

草は金鉤に信せて 斜めに芽を発す

安くにか思ひの摩詰の如き手を得て

画軸に写し成し 人に向かいて誇ら

んや

この作品では、「浅碧、輕黄、団茶、香膩、金鉤、発芽」といった特徴的な詩語は、『聯珠詩格』に見当たらない。しかし、首句にある「数畝春畦」というかなり特徴的な四文字が『聯珠詩格』にある王元之の作品に見られる。そして、この王元之の作品は『四庫全書』に見当たらない。また、「数畝春畦」という語も『四庫全書』には見られない。つまり新井白石が見たと思われる王元之の作品は、白石と同時代の中国ではほぼ失われていたものである。したがって白石は『聯珠詩格』か、または日本に伝来した類似の本を見て、この語を取ったと考えられる。

さらにもうひとつ、明らかに『聯珠詩格』を参照していると考えられる例を挙げる。

紅梅 二首其一 新井白石

一種春風氣自殊 一種の春風 氣は自ら殊なり

星冠月佩爛珊瑚 星冠 月佩 珊瑚爛たり

今來若正花王號 今來 若し花王の号を正さば

南面稱孤應赤符 南面して孤を稱し赤符に應ぜん

紅梅を詠じた連作の第一首である。この作品は『聯珠詩格』巻六に収める次の詩を踏まえている。

梅 宋・蔡正孫『聯珠詩格』巻六

春到江南第一枝 春は到る 江南 第一の枝に
瓊礪瑤珮列參差 瓊礪 瑤珮 列なりて參差たり
雖然未正花王號 未だ花王の号を正さずと雖然も
衆卉終當北面之 衆卉 終に當に之に北面すべし

蔡正孫は『聯珠詩格』の撰者の一人である。この詩は『四庫全書』には見えない。『聯珠詩格』にしか収録されていないと思われる。したがって、白石は他の詩集ではなく、まさに『聯珠詩格』でこの詩を見たことになる。

これらのほかにも見つけられた幾つかの例から、青年時代の白石が『聯珠詩格』を学んでいたことを、かなりの確率で言うことができる。ただし『聯珠詩格』の影響は『陶情詩集』の前半に集中して見られる。後半になると、『聯珠詩格』を参考にすることなく詩の創作に当たったようになって見受けられる。『聯珠詩格』は漢詩の初学者のためのテキストであったから、漢詩の制作を重ねるにしたがって、白石は『聯珠詩格』から離れていったようだ。新井白石の漢詩修行の足跡としても、また当時の漢詩学習者の勉強方法について考える上でも、興味深い事実である。

3. 小結

ここに挙げたのは『錦繡段』と『聯珠詩格』という二冊の書物に関する調査であるが、当時存在していたより多くの書物について調べてみた。それによって、新井白石が十代から二十代にかけてどの本によって漢詩の勉強をしたのか、とい

うことが分かってきた。こうした研究によって、日本人が外国文学であつた漢詩をいかに受容し、自分のものにしていったか、という軌跡を知ることが出来るのである。

四 総結

本論では、もともと中国文学を研究してきた者が日本漢詩を研究するときに、どのような研究方法が可能か、という観点から、これまで行つてきた三種の方法を紹介した。もちろん、このほかにも様々な研究方法があることと思う。中国古典文学研究者は、中国文学に習熟した者として、また日本漢詩をかなり容易に読むことができるという利点を生かして、おもに作品の比較や影響関係の分野で特徴的な研究を行つていくことが出来るのではないだろうか。

注

- (1) 拙論「柳宗元と日本漢詩」(『中国詩文論叢』岡山大学、二〇一二年、所収)による。
- (2) 『陶情詩集』に見える諸本の影響」(共著)、『新井白石『陶情詩集』の研究』汲古書院、二〇一二年、所収)による。